維新秘話

伊藤痴遊全

伊藤痴遊全集

第十卷

昭和四年三月十日印刷
昭和四年三月十五日發行

伊藤痴遊全集　第十卷

著者　伊藤仁太郎
發行者　下中彌三郎　東京市麹町區下六番町一〇
印刷者　濤川薫　東京市麹町區下六番町一〇

發行所　東京市麹町區下六番町一〇　振替東京二九六三九番　株式會社　平凡社
電話九段　一六六四番　三三四七五番　六四七番

共同印刷株式會社印行　本製　社共　三

第十卷　維新秘話目次

明治大帝時代の始

御幼少篇　――御降誕當時の紛糾せる國狀――

孝明天皇崩御――明治大帝の踐祚

攘夷倒幕――公武合體の夢

長藩の策動――眞木と田中の働き

無禮講の宴――寺田屋事變と大久保

英人殺傷事件から尊攘派振ふ

御親政篇　――王政復古の發令より遷都まで――

新政の大方針――建武中興と神武創業の兩論

遷都論から江戸遷都決定まで

帝都東京――大木知事と調金の苦心

聖意無量――山陽の墓へ御使を給ふ

廢藩置縣とその御英斷ぶり

功臣篇　――三傑を初め諸臣の御奉公振り――

征韓論後の木戸、大久保、伊藤、井上

副島侍講――聖慮に感泣す

三浦の直奏――條約改正是非論の當時

幕府倒潰の始末……四七
遷都の眞相……五四
新政府の組織……六九
明治初年の大陰謀……六五
豫算問題最初の大衝突……七四
政商山城屋和助(一—五)……八七
長州藩と三谷三井兩家……一二
著名なる暗殺三件(一—三)……一三〇
奇傑雲井龍雄(一—一〇)……一四四
廢藩置縣の斷行(一—三)……一八二
尾去澤銅山の横領(一—四)……一九七
岩倉の洋行と當時の外交……二二六
奴隷開放の爭(一—二)……二三七
征韓論の眞相(一—八)……二四〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

國會開設運動の始(一—四)……二八一
岩倉具視の遭難……二九五
臺灣問題の經緯(一—三)……三〇〇
大阪會議の顚末(一—三)……三一八
佐賀の叛亂と江藤の刑死(一—七)……三三五
前原一誠の亂(一—一〇)……三六六
敬神黨の暴動(一—四)……四一三
東京の思案橋事件……四二三
西鄕隆盛の擧兵と最期(一—六)……四四一
木戸と大久保の死(一—九)……四五七
土佐派の陰謀……四七九
竹橋暴動……四八八
三菱會社の勃興……四九五
國會開設の請願運動……五〇四

官有物拂下事件……五一三
國會の詔勅と政黨創立時代……五一五
自由改進兩黨の軋轢……五二五
朝鮮事件の內祕……五四
自由黨の國事犯……五五三
福島事件——高田天誅黨——加波山事件——靜岡事件——名古屋事件——飯田事件——秩父暴動
特殊の國事犯……六二
浦和事件と大阪事件

維新秘話

明治大帝時代の始

此稿を起すに就いて

明治節の御制定によつて、明治大帝の御盛德と御鴻業は、また更に追仰敬慕さるゝ次第である。大帝御降誕の當時は、內憂外患並び起り、大勢の赴くところ、殆んど測り知るべからざる狀があつた際であり、殊には、間もなく御父帝の崩御となり、御跡を襲ひ給うて、一天萬乘の君とならせ給うたのであるから、その御苦心も、一段と深くましました事は、拜察に難くない。この際に於かせられて、大帝の御英斷は事毎にあらはれ、賢相名臣の立働きを自由ならしめ給ひ、遂に維新の宏謨は確立せられたのである。私は、その前後の事情から、次いで遷都の經路、廢藩置縣の御英斷によつて、封建の殘夢が一掃され、又、人權恢復の御發令によつて、永く惠まれざりし無告の民を救はせ給うた、聖德の有難さ等を、具體的に事實を擧げて、國民の前に、大いに語つてみたい、と思ふ。蓋し御治世の中葉以後の御事蹟は、今なほ國民の記憶に新たであるが、初期の事どもについては、廣く一般には傳へられて居らぬものがあるからである。

同時に、當時御左右に侍した諸名臣に關する逸話等も、御聖德の一端を窺ふに足るものとして、見逃し得ざるものであると信ずる。たゞ草莽の微臣、事を識る淺く、文を行るに疎く、心のまゝに及ばざることの多きを、偏に憾みとするものである。

御幼少篇

――御降誕當時の紛糾せる國狀――

孝明天皇崩御

孝明天皇の崩御は、慶應二年の十二月二十五日であつた。

朝廷の御內事は、すべて國民へ知らさず、一切、神秘的に取扱はれて居た時代であるから、御不例の事さへ、國民は知らずに居たのである。

されば、陛下の崩御は、全く寢耳に水の突發事として、國民の驚愕は、譬ふるに物もなきほどであつた。

薩長聯盟が成つて、幕府側との爭ひが、やうやく頂點に達して居た時であるから、京都の內外は、血腥さい風がしきりに吹き荒んで居た。

明治大帝の踐祚

朝廷の御思召にも、幾多の變化があつて、常に動搖勝ちであり、或時は、薩長派の意見が、朝意として示された事もあり、また或時は、幕府側から傳へられたる、朝廷の御沙汰なるものは、それと全く正反對の事もあつた。

攘夷は、朝廷の御趣意であつても、幕府は、それに頓着なく、開國條約に調印して、すでに二三の新しい開港場も出來たくらゐであつた。之れに對する朝廷の嚴しい御沙汰、それを利用して、倒幕派の策動等、目まぐるしいほどの暗鬪がつゞけられて居る時に、崩御の大事が傳へられたのであるから、惡い噂は、それからそれへ廣がつて、この前途どういふことに成行くか、といふ恐怖の念は、國民の頭腦に、すぐ湧き起つて、何となく不安の夢に襲はれて居た

のである。

崩御の事が公けにされたのは、同じ月の二十九日の辰の刻であつた。越えて、翌三年の正月九日、祐宮睦仁親王殿下は、晝の御座に出御あらせられて、踐祚の御式を擧げさせられた。

なほ、當時の記錄によれば、御踐祚の御披露は、紫宸殿に於いて、三月一日より執り行はせられた、とある。

近衞、鷹司、一條、二條、九條の五攝家を始め、傳奏、議奏、近習、權大納言、德大寺中納言、近習御番御免。二日には、中務卿宮（有栖川幟仁親王）尹宮（中川宮）式部卿宮、帥宮、內々、內內公卿、殿上人。三日巳の刻には右大臣、午の刻には、仁和寺宮、內々門跡隨心院准后。四日には外樣公卿殿上人、同小番御免、同參勤、同入道。五日には、黑御所にて、大乘院門跡、一乘院門跡、隨心院門跡。六、七、八日には、神宮奏事始を、理性院本坊において、大元帥法を、東寺にて後七日の御修法を行ひ。九、十兩日は、黑御所にて、非藏人の諸禮を受けられ、十一、十二の兩日には、知恩院、十三、四の兩日には、大元帥法後七日阿闍梨。十五日は大谷派本願寺。十六日は養源院、法隆院、南禪寺、五山。十七日は、兩賀茂奏事始、十八日は、護降院、小池坊、智積院、蓮臺寺、本性寺の諸禮を、前同樣、黑御所に受けさせられ、御卽位式の御準備として、此の時新調御道具係に、廣橋大納言、六條中納言、久世宰相前中將、御造營御修覆に、柳原大納言、葉室右衞門督。また御道具御用掛に、冷泉中納言、三室戸三位、伏原三位に、夫々仰付けられたりき。

斯ういふことが、書き殘されてある。

先帝の崩御について、民心に、やゝ沈衰動搖の兆が、現はれかけた時、新帝御卽位の事が、かく迅速に運ばれた爲めに、一と先づ民心の落付きを視たのである。

さて少しく遡つて、祐宮殿下の御降誕は、嘉永五年（壬子）九月二十二日であつた。卽ち陽曆にすると、十一月三日に當る。御生母は、權典侍藤原慶子と申上げ、後に一位局とならせられる御方である。外祖父は、中山大納言忠能

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

卿にして、當時の中山邸は、御所の東北に當り、今では鐵柵を繞らされてある、約三百坪ばかりの地、それが卽ち中山邸址である。

御降誕の翌年、旱天打ちつゞきて、洛の內外、井水全く涸れて、殆んど一滴の水を得るにも苦しむほどであつた。中山家に於いては、御幼少の皇子を抱きまゐらせながら、この渴水に、忠能卿の苦惱は一と通りでなく、思ひあまりて、邸內に鑿井を試みることになつた。しかるに、掘ること三丈八尺餘にして、淸泉の湧き出づるに逢ひ、その喜びは譬ふるに物なく、直ちに參內して、此旨を陛下へ申上げると、陛下に於かせられても、大いに御滿悅遊ばされ、祐の井と命名せられた。今もなほ京都御苑內の聖蹟として殘る祐の井の由來は斯うである。

殿下は、第二の皇子として、御降誕遊ばされたのであるが、第一の皇子は、世を早くせられたるを以て、順位として大統を襲がせられることになつたのである。

御養育掛としては、忠能卿これを承はり、御乳人は、伏屋美乃子であつた。儲君として御治定相成りしは、萬延元年三月十六日にして、寶齡九歲の御時であつた。親王宣下は、九月二十八日で、御名を睦仁と賜はつた。

御學友としては、岩倉具定、西園寺公望の兩卿、御學問始めは、淸原宣明卿が勤めた。御歌は、畏くも父帝の敎へを受けさせられ、御筆道は、有栖川幟仁親王に學び、御成績は、極めて良い方であつた。

漢學の御指導は、中沼了三といふ人であつたが、この人は、皇居を江戶へ遷させられ、東京と改まつてから後も、侍講を勤め、元田永孚と相並んで、長く進講の御役に當つて居たのである。

攘夷倒幕　公武合體の夢

明治大帝の御名は、世界に響き渡り、御列聖中に於いて、殊にすぐれさせ給へることは、すでに人も知る通りであ

るが、御降誕あらせられし、嘉永五年といふ歳を終へ、更に翌六年には、何事の起つたか、といふ事も思ひ合せ、儲君として御治定ありし、萬延元年には、如何なる事が起つて居るか、これ等の事を、靜かに考へてみると、頗る感慨深きものがある。

殊に、御即位の當時は、德川慶喜が將軍職辭退の直後であつて、御左右には、三條實美、岩倉具視、西鄕吉之助、大久保市藏、廣澤兵介、木戸準一郎等の賢相名臣が、お附き申して居たが、陛下は此時局に當つて、萬機を御親裁遊ばさなければならなかつたのであるから、未だ御弱冠の御身としては、可成り御苦心あらせられた事と、拜察し奉る次第である。

鎌倉以來、武家の天下は六百年、朝威の衰頽は、言語に絕えた狀況であつた。群雄は、四方に起り、武力を以て領地の爭奪はしても、朝廷への御奉公は、更に考へて居なかつたから、朝廷の御內帑は、五萬石の小大名にも及ばず、宮廷の玉垣は、長く修理もされず、紫宸殿の庭前には、雜草離々たるの狀態であつた。

ペリーの渡來から、攘夷開國の爭ひが起り、幕府の條約調印は、朝威を無視した僭越の所爲である、と云つて、各藩の有志や、浪人の蹶起するものが多く、江戸と京都の間には、紛爭の絕ゆる間がなかつた。

條約の問題に絡んで、將軍繼嗣のことが、容易ならぬ爭ひとなり、井伊直弼は、新たに大老の職について、尾水越三侯を斥げ、斷々乎として紀州慶福卿を、繼嗣として屆け出た。

將軍の繼嗣に關しては、朝廷の力、之れを如何ともすることが出來ぬのであつた。けれども、此一事は、直ちに條約調印の一條に、深い影響をもつのであるから、朝廷の重臣は、幕府の屆出を、無條件に容れることを避けて、何とかしたかつたのである。

越前の橋本左內が、松平春嶽の內意をうけて、京都に入込み、三條實萬卿を說いて、その允許を遲れさせたのは、此時の事であつた。

井伊大老は、内外の狀況を知ると、間部下總守と酒井若狹守に命じて、朝廷を威嚇し、公卿を懷柔して、遂に允許を得るに至つた。それと同時に、大疑獄を起して、反幕派の志士を、思ひ切り、酷い目に逢はせた。

その翌年、櫻田の凶變で、井伊大老は、水戸浪士のために、登城の途を擁されて、遂に斬殺されてしまつた。

文久の年に入ると、先づ大和行幸の問題が起り、引つゞいて京都の政變となり、毛利の勢力は、一夜にして覆へされ、會薩二藩の力が、毛利に代つて、京都を支配するやうになつた。

この時の朝廷は、右に左に動搖して、殆んど一定の方針なきが如く、會薩長三藩の動く通りに動くの外はなかつた。しかも、條約の問題は、刻々に迫つて來て、唯一の朝意として傳へられし、攘夷の御趣意も、今は甚だ覺束なくなつた。

しかしながら、一般的に視る、攘夷の勢ひは、次第に昂くなつて、それが倒幕論に結び付けられてゆくから、幕府の連中は、ひどく之れを氣に病むやうになつた。

折柄、島津久光の上洛は、佐幕、倒幕、攘夷、開國、各派の有志に向つて、非常な衝動を與へた。

久光の上洛が、毛利の勢力失墜前であつた丈けに、倒幕派の有志は、久光に期待する處、頗る多くあつたのであるが、實は、久光といふ人が、公武合體の夢から、未だ醒めてゐなかつたので、その態度は極めて曖昧なものであつた。

薩藩士中の急進派は、よく之れを知つて居たので、久光の入洛と同時に、攘夷倒幕の義兵を起して、否も應も言はさずに、久光を擔ぎ上げてしまはう、といふ計畫を立てゝ、大阪の薩邸から、有馬新七以下十數名の志士が、伏見の寺田屋へ乘込んで來た。

長藩の策動

眞木と田中の働き

この策動の裏には、長州藩士があつて、可成り強い煽りをかけて居たのだ。參謀の如き位置にゐて、萬事の指揮をするものには、眞木和泉守と田中河内介が居た。

田中は、中山家の臣である。明治大帝御降誕の當事は、萬事を引受けて、その準備に、忙しく奔走した一人であつた。

但馬國出石郡香住村に、小森正造といふ醫師があつた。その次男に生れたのが、賢次郎と呼ばれて、幼少の頃から井上靜軒の教へを受け、和漢の學に通じて、はやく京都へ出たが、中山家に奉公して居るうち、忠能卿に知られ、諸大夫田中某の養子となり、河内介と改めたのである。

中山家に事へて、睦仁親王の御降誕以來、御養育に關する雜務は、多く河内介が取扱つて居たのであるから、中山家の苦しい内情も、よく知つて居るし、殊に、皇室の御内帑が、非常な窮迫を告げてゐた爲めに、中山家が、御養育に苦しんだことは一通りでない。それらの事に刺戟されて、河内介が、幕府に對する、一種の反感は、漸く深くなつて來て、遽てその感情が、倒幕運動に移つて來るのは、固より當然なことであつた。

長州の毛利は、元就の昔から、朝廷に對しては、常に御奉公を怠らなかつた。敬親の代になつてからは、特に其點については、深い注意を拂つて、朝廷への貢は勿論、要路の公卿に對しても、それ〳〵に手を盡して、その窮迫を救ふやうにして居たから、朝廷内に於ける、毛利の潛勢力は、可成り強いものであつた。

毛利の勤王については、種々に說があつて、或は、倒幕のための勤王である、ともいふし、その他にも揣摩憶測の說も、隨分多くあるけれど、いづれにしても、朝廷に對しては、毛利家の代々が、能く盡した事は、掩ふべからざる事實であつて、これが爲めに、元就以來、菊桐の御紋章を、許されてゐたといふ事が、何よりの證據である。

中山家に對しても、常に藩士の出入は多かつた。されば河内介の如き、公卿の家來としては、珍らしいほどの有志家肌合の人物が、長州藩士と親しく往來したのは固よりいふ迄もない事であるが、然うした關係から、河内介を通

じて、中山家に、長州藩の金が廻つてゐた事は、想像するに難からぬ。

さればとて、河内介は、長州藩にのみ偏つて、事を爲さう、といふ考へではなく、苟も自分の考へ通りに、倒幕の運びがついて行けば、誰とでも組合つても可いといふ、覺悟はあつたのだから、長州藩に對して、何となく反目し勝ちであつて、薩藩の有志とも、密かに往來して、色々と計畫を進めてゐた中に、薩藩の急進派を、長州藩の連中が煽りつけて、久光を擁して、一旗揚げる、といふ迄に、進んで來たのである。

此計畫は、可成り大きい目論見であつたから、巧く行けば、倒幕の目的は、達せられたに違ひないが、一つ間違つたら、その反動で、幕府の手は、何處まで伸びて行くか判らないのであるから、萬一にも、中山家に禍ひの及ぶやうな事があつては、それこそ一大事であると考へて、河内介は、遂に中山家を去つて、大阪へ身を匿すことになつた。

大阪の薩邸には、例の眞木和泉守が潜んでゐて、河内介と通謀してゐたのである。眞木の事は、詳しく言はずとも既に弘く知られて居るが、其頃には、故郷の久留米を離れて、毛利家の厄介になつて居たのだ。

此人は、水天宮の神官ではあつたが、熱烈な倒幕論者で、黑田の平野國臣が、那あした強い倒幕論を唱へるやうになつたのも、その因は、眞木に煽りつけられてからのことである。

有馬家は、佐幕に近い方であつたから、眞木のやうな、強い倒幕論者の居る事は、幕府に對して、憚かり多い事でもあるし、藩の統一を亂す惧れもあるので、眞木を親類預けにして、監禁して置いたのであるが、眞木は、隙を窺うて、その監禁から遁れて、長州へ入り込み、豫てからの同志が、之れを擁護して、毛利家が、密かに世話をするやうになつて居たのだ。

此二人は、共に武家の出身でなく、一人は、田舍醫者の伴であり、又一人は、神官を勤めて居た身分で、かうした激しい倒幕運動を、薩長二藩の有志に據つて起さうとしたのであるから、頗る妙である。

然るに、薩藩士の計畫が漏れて、久光側近の連中は、頻りに策動して、その計畫を止めさせよう、と謀つたが、急

進派の決心が堅いので、正面から壓迫しようとした。それが爲めに、寺田屋騒動なるものが起つて、薩藩士の同士討に、血の雨を降らすに至つた。

尤も、この計畫に對しては、久光側近の家來が反對したばかりでなく、久光自身も、頗る迷惑を感じたのであつて寺田屋に集まつて居る、有馬新七以下の藩士を、抑へ付けるために出掛ける、奈良原喜八郎以下の者に對して、可成り強い命令を下したので、遂には血の雨を降らすやうなことになつてしまつたのだ。

その結果として、河内介も、一時は薩藩の手に捕へられ、中山家へ懸合ひになつたが、すでに暇を取つて、浪人してゐたのであるから、中山家には、何等の責任はない譯である。

そこで、河内介は、薩藩へ、一時お預けといふ事になつて、その一子、瑳磨介と共に、藩船に乘せて、鹿兒島へ送る事になつた。

ところが、鹿兒島へ送られた筈の河内介父子は、鹿兒島へ行かず、船が播磨灘へ掛かつた頃、護送の役人が、二人の手足を縛して置いて、無殘にも、斬り殺した上、海に投じてしまつた。

どういふ譯で、薩藩士が、斯うした殘忍な處置を執つたかといふに、當時の薩藩は、重臣の間に、佐幕論者が多く居るので、河内介のやうな強い勤王論者を、鹿兒島へ送り込んでは、薩論の上に、少なからぬ影響を持つものとしてそれを避けようが爲めに、此手段に出てたのである。

無禮講の宴

寺田屋事變と大久保

この寺田屋事件があつた時、睦仁親王の御年、僅かに十一歳であつた。如何に高貴の御身分に在らせられても、十一歳くらゐの御幼年時に、かゝる事件を御存じの筈はない、と誰にしても、思ふのが普通である。然るに、實は能く

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com